

# ファンティエットにて

写真・文: 寺本 実  
Minoru Teramoto



北副祠堂（チャンパのポーサヌー遺跡）

遺跡の背景に広がる南シナ海

ビントゥアン省の省都ファンティエット市。ベトナムの沿海地域に位置する、面積二〇六・五平方キロメートル、人口二一六三〇〇人（『ベトナム行政地図集』ベトナム資源環境・地図出版社、二〇一三年）の都市である。

二〇一四年一月中旬、ビントゥアン省で福祉関係の調査を行う目的で同地に入った。手続きの問題もあり、準備の余裕がなく、徹夜で初日を迎えた。朝五時四五分に南部の中心都市ホーチミン市を自動車が発し、NHK『ダーウィンが来た！』のヒゲじいに似たサポテン科のドラゴンフルーツ畑などを視界に入れながら、ファンティエット市に入ったのは午前一〇時四五分頃。まず外務担当の機関に行ったが、通常は直接会って挨拶をする責任者に面会できなかった。当日、同市内で外国人が亡くなり、対応に追われているという。昼食を挟み、午後。調査地を紹介いただくため、担当の役所に挨拶にうかがう。責任者によれば、当初予定していた農村部ではなく、都市部を調査地にとのこと。翌日も内部の手続きを行うため、調査を開始できないという。具体的な調査地はこの段階で明示されなかった。これまで土地の人に紹介いただくのが常であった宿所についても、当日借り上げた車の運転手の奥様が観光会社で働いており、割引対応できるとの言葉に乗る形に。現地との仲介役を担う同行



ズックタイン学校史跡



小学生が説明を熱心に聞いていた（ズックタイン学校史跡）



学校創設の発端となったグエン・トンの思いがこもる場所。往時には読書、詩作、接客などに使用された（ズックタイン学校史跡）



ファンティエット市の海岸線。向かって左手にある丘陵にチャンパのポーサヌー遺跡とフランス植民地支配所縁の史跡が見える



フランス植民地支配の跡

のアシスタントは、ホーチミン市に戻る自動車に同乗して途中にある故郷の実家に帰ることに。当初描いていた形と全く異なる展開に、寝不足も手伝ってしばし呆然となった。

翌朝七時三〇分。少しでも時間を有効に活用しようと地図を片手に外に出た。タクシーで北上してチャンパ王国のポーサヌー遺跡へまず向かう。チャンパ王国はベトナムの中部、中南部地域に二世紀末から一〇〇〇年を超えて続いた、インド文化を取り入れた王国である。一五分くらいで大人しい街並みを抜けて到着。一万ドン（小袋お菓子二つ分相当。訪問時一ドル約二万一〇〇〇ドン）のチケットを買い、同区域に入つて行くと、煉瓦を少しずつ積み上げた、チャンパの祠堂が見えてきた。チケット購入時に入手した資料等によると、ヒンドゥー教に由来するシヴァ神を祀るためにこれらの祠堂は八世紀末から九世紀初めに建てられた。チャンパの建築様式としては早期のものという。ポーサヌー遺跡では、祖先を偲び、加護、幸福を祈るカテ祭りが二〇〇五年から復活され、毎年チャム暦の七月一日（陽暦の一〇月頃）にあわせて行われている。丘陵上にある遺跡の背後には、一二〇〇年前の土地の人々も眺めた青い南シナ海が広がっていた。

少し行くと、フランス植民地支配に所縁<sup>ゆかり</sup>の遺構も。現場に立つ中央部が傷ついた青地に白字の看板に書かれた説明等によれば、フランスの公爵が一九一〇〜一一年に建設を開始した美しい別荘がこの周辺にあり、第二次世界大戦後ベトナム復帰を図ったフランスが一九四六年に



関帝廟。多くの人が願い、祈る場所のひとつ



仏学寺。訪問出来なかったがこの先には教会がある



人々の暮らしを見守る観音菩薩。願い、祈る人の姿がここにも

同別荘傍に駐屯所を構築した。しかし、一九四七年六月一四日、フランス兵に偽装した抗仏のホアン・ホア・タームの団の襲撃を受け、施設は破壊され、フランス兵三五人が殺害もしくは捕縛された。

ふたたび市中心街へ。ズックタイン学校史跡に向かう。同史跡の碑文等によれば、同学校は詩人、愛国者のグエン・トンの子息、グエン・チョン・ロイとグエン・クイ・アインらによって一九〇七年末に建てられた私学校（一九一二年）。グエン・タット・タイン（後のホー・チ・ミン）が、父親の知人で詩人、愛国者のチュオン・ザー・モーの仲介で、一九〇〇〜一年の時期に先生を務めた。タインは主に国語、漢文、体育を教えた。一九一一年二月にこの地を離れたタインは、同年六月にサイゴン（現在のホーチミン市）から渡仏の船路に就く。

それほど高くない門を潜ると大勢の小学生が木造の建物内で長椅子に腰かけてアオザイを着た女性から説明を聞いていた。幼稚園の園児達、学生達も見学に来ている。敷地内を一回りした後、マシンガンを持った守備兵の脇を抜けて外に。道路を挟んで向かいにあるホーチミン博物館に入る。すぐそこには海も間近のカーティ川。漁を終えた船が羽を休めていた。

館内を見学した後、「市内最大の書店へ行ってください」と待機してくれていたタクシーの運転手にお願いと、南部の中心都市ホーチミン市でもおなじみの書店 F.A.H.A.S.A を紹介される。行ってみると、他の地方と同様に地元について書かれた書籍類は置いていなかった。書店があるショッピングセンターを出ると、



カーティ川。海はすぐそこ



ファンティエット市場は建設工事中。人々はこの周囲で市を展開していた

てらもと みのる / アジア経済研究所 東南アジア=研究グループ

ベトナム地域研究に従事。ベトナムの社会福祉、生活保障、平和などに関心を持つ。



ドラゴンフルーツ畑（仕事を終えてホーチミン市に戻る列車の車窓から）



電線にまたがり作業をするおじさんがいた。集中しないと危ないので何の作業をしているのか聞くのは控えた

ここまで付き合ってくれていたタクシーがい  
ない。料金を支払った後なら分かるが、まだだ。  
運転手は「待っている」と言っていたので、帰  
ってくるだろうと思っていたら、三〇分しても  
一時間たつても戻らない。業を煮やして近くで  
客待ちする同じタクシー会社の運転手に同社の  
電話番号を聞き、応対の女性に状況を伝えて消  
えた運転手を探してもらおうようお願いする。し  
ばらく待ったが、応答がない。やむを得ず、再  
度同社に電話をして宿泊先の受付に代金を預け  
る旨を、消えた運転手に伝えてほしいと依頼す  
る。傍にいたタクシー運転手三人にも同じこと  
をお願いして、その場を離れた。

その後、先の書店で紹介された別のFAHA  
SAへ行ってみたが結果はほぼ同じだった。

労働・傷病兵・社会局、財政局、司法局など、  
公的機関が立ち並ぶグエン・タット・タイン通  
りを歩いて宿所へ向かう。日差しが強く、少し  
歩くだけで汗が目に入る。「汗を多くかく人は  
弱い」。ある傷病兵が言っていたのを思い出す。  
生理現象をも許さないのが戦争なのだろう。

ホテルの受付で事情を説明してタクシー代二  
九万ドンを託す。休憩のために部屋に戻り少し  
すると、受付から「タクシー代は二八万ドンで  
す」との連絡が入った。事の仔細は分からない  
まま。しかし、消えた運転手は四〇歳で三人の  
子供がいると言っていた。連絡がついてよかつ  
た。

どの土地にもそれぞれの歴史と人々の暮らし、  
事情がある。